

Tea Time Talk with Midori ●Photographer Satoshi Teradate

「人類が初めて月に
月面着陸した時なんか
『月は見えるもので行く所では
ない』なんて言う人も
いたんです。」



対談した野口聡一さん（右）は、帰国後、JAXA（丸の内）ロケットエンジン（LE-5）前に

西浦みどりのアフタヌーンティー



対談連載

10

~ Guest ~

野口聡一

宇宙飛行士

のぐち・そういち
1965年、神奈川県横浜市生まれ。1991年、東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻修士課程修了。同年、石川島播磨重工業（株）に入社。1996年6月、ミッションスペシャリスト（MS）候補者として、宇宙開発事業団入社。同年8月より米国防空宇宙局（NASA）にて実施されるMS基礎訓練コースに参加し、1998年4月にMSの資格を取得した。2001年4月、国際宇宙ステーション組立ミッションである米国防空宇宙局（NASA）「STS-107」の搭乗員に任命され、2005年7月、スペースシャトル「ディスカバリー号」に搭乗。MS1として船外活動などに従事し、約14日間のフライトを行った。

野口 おはようございます。といっても、こちらは深夜近いのですが、東京とニューヨークをテレビ会議でつないでの対談なんて、生まれて初めてなので、ものすごくエキサイトしています。

野口 おはようございます。今日は、よろしくお願ひします。

西浦 はい、こちらこそ。私、正直いつて宇宙のことは何もわからないんです。でも、非常に興味を持っていて、魅せられてきました。今日はあこがれの野口さんに何からお聞きしてよいやら、とまどっています。

野口 何でもどうぞ（笑）。

西浦 まずは、体調はいかがですか？

野口 いいです。地球に帰ったのが8月9日ですが、打ち上げの時に無重力に慣れるより、その逆の地球に戻った後に重力に慣れるほうが長くかかると、平衡感覚がにぶつて、足が山登りをした後のようにたらく、疲れますね。

西浦 そうですか。むくみもですか？

野口 無重力だと、ベッドに2週間横になつていたようなものですが、頭に血が集まっていたのが、地上だと足にたまってきて、血行が悪くなるんと思います。

西浦 それなのに、以前拝見した地球上着陸後の会見で「また、すぐにでも宇宙に戻りたい」とおっしゃったのを聞いて、びっくりしました。

野口 無重力空間というのは、まあ楽なものなんです。だいたい四畳半くらいの空間に7人で暮らしているんですが、夜なんか天井に張り付いて寝てる感じなんです。要するに、無重力だと4つの壁に床、天井と、6面使えるわけです。結構広々してますよ（笑）。それでキャリーと言われる、ちよと旅客機で言ったらキャビンアテンダントが調理をしている台所のような場所があるでしょ、それと同じようなものがスペースシャトルの中にもあつてそこで調理したり、みんなと暮らしているんです。楽しいですよ。だからそんな意味でなつかしくて（笑）。

西浦 そうだったんですか。お耳がつーんとしませんでしたか？

野口 耳はやはり気圧が下がる時につーんとします。船内は、地上と同じ気圧くらいで大丈夫なんですけど、僕の場合、船外活動もしますから、宇宙に出る前夜には0.4気圧くらいに慣れる準備をします。

西浦 気圧変動があつても音楽は船内で聞きますか？

野口 はい、ステイブ・ロビンソン飛行士はバンドをやっていましたし、音楽好きで、CDプレイヤーをスピーカーにつないで音楽をかけていました。船上はちよとしたパーティー会場みたいでしたから、みんなワイワイやつて楽しかったです。

西浦 本当に楽しそう。船外に最初に出た時はどんな感じでしたか？

野口 最初に、リッチを開けた時、目の前に地球が見えたんです。弓型をしていて、明らかに浮いていて、まわっているのわかります。自分もまわっているんですけど、ドーンとした存在感で、佇んでいるんです。スゴいところに来た、と思つて強烈な印象でした。やはり、船内から何重にもなっている窓越しに見ると、ヘルメット越しに見るとは、広がりも違います。

西浦 そうですね。地球の国々はひとつひとつ見えますか？

野口 それが、船内からでも、みんな今自分たちがどこにいるか常に意識して、あと5分でニューヨークの上を通るよとか、コンピュータで計算してわかるようになってるので、僕の場合はやはり、いつ日本の上空を通るかを気にしました。

「あと2時間で福岡だ」とかね。パッと船内から見てわかりやすいのは、地中海をぬけてシナイ半島、イタリヤ、シリア、そしてエジプトのナイル、サハラは三角だからわかりやすかったです。

西浦 そんなに見るものなのですかね。

野口 僕たちは、そんな程度でしたが、3カ月も宇宙ステーションに住んでいるクルーは窓越しにパッと見て、「今どこそこだ」とか「前にここは通った」とか、わかるんですよ。

西浦 すごくすごいですね。

野口 船外活動では、昼と夜が45分交代でやってきて約1時間半で地球を一周まわるんですが、昼の世界の時は、太陽が燦々と輝いていて、海も地上もスペースシャトルや国際宇宙ステーションも

きれいに見えるんです。まぶしいくらいで、金色の反射防止バイザーを下げて作業します。夜の世界になると、ほんとに真っ暗で手元さえ見えません。バイザーを上げてヘルメットについているライトを頼りに作業するんですけど、いきなり洞窟に入ってしまったみたいで、自分がどこに移動しているのか頭の中で考えてしないと危ないです。方向感覚を失ってどんどん離れ、戻れなくなったら大変です。一応命綱やたぐさんツールをつけているんですけど、かんでしまったりする可能性もあるので。

西浦 大変だね。まさに人類発展のために命がけのお仕事ですね。野口さんは、いくつくらいか、宇宙飛行士になりたいとお思いになられたんでしょうか？
野口 そうですね、小さい頃は、乗り物として漠然とロケットに興味を持ち、小学生の時にロケットに乗りたいなんて、作文を書いたみたいですけど。仕事としての宇宙飛行士という意識は小さい時とは違うので、高校1年生の時でしょうか。世界初のスペースシャトル、コロンビア号が打ち上がって、それが大きなきっかけになりました。

西浦 よく、「地球は青かった」という名セリフが聞かれますが、どのような青なんでしょうか？
野口 それを表現するならばブルーの青です。ほとんど海ですから、地球はつくづく水の多い星だなと実感しました。熱帯地域の明るい青から北の方の深い青、そしてすこきれいなのが珊瑚礁の緑です。アジアだったら、グアム・サイパンといったところでしょうか。島自体は小さいのですが、珊瑚礁は緑色に広がっています。

西浦 宇宙飛行士になりたいと意識を持ちはじめた頃にお話を戻しますと、ご両親はどう受けとめられましたか？
野口 その頃は、まだ日本人宇宙飛行士は皆無でした。どういう進路をとったらいいかわかりませんでした。友人たちは将来の進路を先生たちと話し合っていましたけど、いきなり宇宙飛行士になりたいと言われても、先生だつて困ったでしょう。両親は、頑張ったらつて応援してくれました。

西浦 それは素晴らしい。それにしても、訓練ひとつとっても過酷では？

野口 僕は1996年に飛行士になって、新人訓練をしたのちに約2〜3年国際宇宙ステーションの一部である日本実験棟「きぼう」の開発のお手伝いをしました。その後今回のSTS-114ミッションに今から約5年前にアサイン(配属)されました。限界以上に過酷な訓練はなかったです。ある能力をどこまで高められるかに挑戦することが多くて。それと、特に7名のクルーが決まってきたら、チームとしての協調や、いかに連携を強めるかのほうが重視されました。

西浦 まさにコミュニケーションが上手く図れるかにかかっていますね。ご家族の協力も大きかったですのでは？
野口 その通りです。僕は9年前に家族と渡米してヒューストン近郊の小さな町に住みました。ヒューストンは大会で

ですが、NASA(ジョンソン宇宙センター)近郊の小さな町は郊外にあり、となり近所も宇宙関連の仕事をする仲間が住んでいましたし、夕方スーパーに行けば、一緒に訓練している宇宙飛行士が買物カートを押していて、「ハイ」って感じで声を掛け合うこともあり和気藹々でした。日常生活にとけ込むことができました。

西浦 奥さまに宇宙飛行士になりたいと打ち明けた時は？
野口 賛成してくれました。頑張つてと。11年前のことです。ですから、今回は特に家内も子供たちもみんな喜んでくれました。

西浦 ところで、最近、何十億円で宇宙旅行ができるとか聞きますけど、お金だけあっても訓練しなくては行くことはできないんでしょうか？

野口 そうですね、現在ですと、ロシアの訓練センターに何週間行つてと。

西浦 じゃ、無理だね(笑)。
野口 ライト兄弟が飛行機を飛ばしたのが100年前ででしょうか。それまでは人が空を飛んで違う国へ行くなんて発想すらできなかったわけ、今では、生活の一部です。今日、出張に行くからと特別な訓練を受ける人はいないと思います。JAXA(宇宙航空研究開発機構)では気楽に、安全に大勢の人々が宇宙に行けるようになるための、横に広がった研究もしています。

西浦 生活の場が宇宙に広がったらいいですね。
野口 月や火星、それから先というように、有人宇宙開発やその他の研究も大事なことです。いろいろ同時にやるとお金がなくなってしまうから、国民の皆さんに納得していただける活動を続けなければと思っています。

西浦 それでなくても政府から予算カット、と言われがちですもの。
野口 今回の場合いくらかは別として、普通1人宇宙に行くと、約20億円かかると言われていますから、そうすると国民1人あたり、12円くらいです。まあ、今回の成果を見て12円くらい寄付してやろうかなとは、思ってもらえたいと思います。

西浦 もちろんです。新しい惑星発見なんてニュースが出るだけでも期待に胸がふくらんで、嬉しくなりますもの。
野口 人類が初めて月に月面着陸した時なんか、一月は見るもので行く所ではないとか、「神聖な場所なんだから、人が行つてはダメ」なんて言う人もいたんです。それと宇宙には未知な可能性がありま

西浦 ですから、新惑星発見については、小さな予算で長期的にできることのひとつです。
西浦 今日は本当に解かりやすく教えて下さいまして、ありがとうございました。



にしろみどり
国際コンサルタント・評論家
(オピニオンリーダー)。
東京生まれ、英国育ち。インベスター・リレーションズを主とする国際金融と都市開発(商業・住宅等)のコンサルタント会社社長としての契約企業・団体多数。テレビのニュース情報番組では、ユーモアたっぷりの辛口コメントで、中高生からシルバー世代まで幅広い支持を得ている。特に若い女性には、エグゼクティブのお手本として人気。政府委員、日本赤十字社医療センター外部評価委員も務めている。5冊目の著書「大人の品格」(PHP研究所)が好評発売中。